

ボーイスカウトとボランティア

—阪神・淡路大震災後の組織的な復興支援活動と葛藤—

圓 入 智 仁

Scouting and Volunteers

— Systematic Revival Support Activities by Boy Scouts and their Conflicts after the Great Hanshin-Awaji Earthquake —

Tomohito Ennyu

(2018年11月22日受理)

1. はじめに

本研究の課題は、1995年1月に発生した阪神・淡路大震災後の支援活動における、ボーイスカウトによるボランティア活動の実態と、そのボランティア活動に対するボーイスカウト内における葛藤を、ボーイスカウト内の議論を通して解明することである。

一般に、この阪神・淡路大震災を契機にして、日本では本格的にボランティア活動が普及し、災害などの際に多くの人々がボランティアとして被災地に集まるようになったと言われている¹⁾。災害後のボランティア活動は、1997年1月の「ナホトカ号重油流出事故」における海岸清掃作業など、現在に至るまで様々に取り組まれている。既存のボランティア団体の立場を強化するため1998年に成立した「特定非営利活動促進法」（1998年3月25日法律第7号）も、この流れに位置づけることができる。

筆者が複数のボーイスカウト関係者から聞いたところによると、1991年に発生した雲仙普賢岳の火砕流発生、2011年の東日本大震災、2016年の熊本地震をはじめとする自然災害発生後、ボーイスカウトは何らかの支援活動に携わっていた。それらは、被災地に送る募金活動、被災地における支援物資の取り扱い、焚き出し、避難所の環境整備や清掃活動など、多岐にわたっていた。これらの他にも、ボーイスカウトは日本各地で発生している大小様々な自然災害後の支援活動に取り組んでいるはずだが、それぞれに関する詳細な記録は余り残されていない²⁾。

以上のことを踏まえ、本研究では、管見の限りほぼ唯一、ボーイスカウトによる災害後の支援活動に関する詳

細な報告書が発行された、阪神・淡路大震災後の復興支援活動に着目する。震災後のボーイスカウトによる組織的な支援活動と、その活動に関するボーイスカウト内部の議論について、特にボランティアのあり方に着目して検討する。

本研究で「ボーイスカウト」とは、個人としてのボーイスカウトの加盟員を指す場合もあれば、個人の集合体としての組織を指す場合もある。前者には、指導者としてのボーイスカウトに加えて、復興支援活動に参加した子どもたちも含まれる。実際に阪神・淡路大震災後の活動においては、主に高校生年代以上の加盟員が、被災地で活動したようである。

2. 阪神・淡路大震災後の復興支援活動におけるボランティア

阪神・淡路大震災と、その後の復興支援活動に関するボランティアの記録は、冊子やインターネットなど、多種多様な媒体によって、多数の報告がある。その中で、例えば本間正明・出口正之編『ボランティア革命 大震災での経験を市民活動へ』（東京経済新報社、1996年）では、震災により「突然のスポットライト」を浴びた地元団体としてYMCAと社会福祉協議会を、さらに「急きょ誕生した別働隊」として「コープこうべ」や赤十字を、それぞれ紹介している。その他にも「自然発生型のボランティア」として「神戸市各区のリーダーボランティア」を紹介し、これら自然発生的に集まってきたボランティアを支援する「ボランティアセンター」に関する説明をしている³⁾。もちろん、震災後に活動したボランティアは、他にもある。同著に詳細な説明はないも

の、上記の団体の他、ボーイスカウトや大学、企業、宗教団体、国際交流団体などのボランティアを含めた「震災ボランティアのネットワーク」を図示している⁴⁾。

それぞれのボランティア団体における、正確なボランティア人数の統計を探し出すことは難しいが、例えば西宮市に限定すると、「西宮ボランティアネットワーク (NVN)」を通して1995年1月17日から3月31日の間にボランティアに関わった156団体9,759名の内訳を知ることができる。過半数の5,644名をボーイスカウトが占め、次いでガールスカウトの487名、「近畿百貨店協会」の349名、立命館高校の224名、「ゼンキン連合」の205名などとなっている⁵⁾。この中でYMCA 関連87名（「西宮YMCA」20名、「松山YMCA」1名の他に、「YMCA」66名）、社会福祉協議会関連34名（大阪府社会福祉協議会10名、奈良県社会福祉協議会11名、府中市社協ボランティアセンター5名、八木町社会福祉協議会8名）、「生協」8名、赤十字関連はゼロであった。NVNの中心人物がボーイスカウト大阪連盟の関係者であり、大阪のボーイスカウトの多くが西宮で支援活動に関わっていたことは事実である⁶⁾。そのことを考慮しても、あるいは、1日限りのボランティアも長期間のボランティアも同じ1名としてカウントする可能性があることを念頭に置いても、少なくとも、西宮市におけるボランティア活動に、ボーイスカウトが果たした役割は少なくないことが想像できる。

さて、ボランティアに関する共通理解として、「自発性」、「無償性」、「公益性」を指摘することができる⁷⁾。「自発（自由意志）性、無償（無給）性、公共（公益）性、先駆（開発、発展）性」を指摘することも⁸⁾。詳細な検討は先行研究に譲るが、ボランティアとは、自らの意思により、何らかの報酬を受けることなく、公のための活動であることが共通している。さらに、個人としてのボランティアの集合体や、個人のボランティア活動を支援する団体を、ボランティア団体と定義することができる。上述の「ボランティア団体」は、この定義で説明できるものがほとんどであると思われる。

このように考えると、本稿で扱うボーイスカウトにおいて、ボランティア活動はどのように位置付けられるのだろうか。あるいは、組織としてのボーイスカウトは、「ボランティア団体」なのだろうか。これらのことを考えるため、以下では、阪神・淡路大震災後の復興支援活動において、ボーイスカウト兵庫連盟がどのような組織を構成したのかを述べた上で、ボーイスカウト内におけるボランティアに対する議論あるいは葛藤を検討する。

本稿では、ボーイスカウト兵庫連盟が震災翌年に発行

した『1995年1月17日：ボーイスカウトの阪神・淡路大震災』（1996年）を主に使用する。これは、阪神・淡路大震災後のボーイスカウト兵庫連盟における支援活動について、県レベルの組織化と、個別のボーイスカウトの「団」レベルでの具体的な活動を、詳細に報告したものである。

3. ボーイスカウト兵庫連盟の組織的な支援活動

ボーイスカウト兵庫連盟（以下、「兵庫連盟」）は、震災翌日の1月18日に「兵庫県地震対策本部」を設置し、それを兵庫県の対策組織に「編入」の上、「現地対策本部」（「兵庫県救護対策現地本部」のことか—引用者）5カ所（神戸市中央区、東灘区、灘区、兵庫区、芦屋市）管理下の避難所15カ所の救援、奉仕活動の調整、管理と指導にあたった。その際、兵庫県こころ豊かな人づくり推進室や、ボランティア推進室の指導を受けたという。現地対策本部に派遣されたボーイスカウトの「奉仕者」は、現地の県職員責任者の指示に従った⁹⁾。なお、1月27日付の情報によると、「兵庫県救護対策現地本部」は、上記5カ所に加えて、長田区と西宮市にも設置されていたようである¹⁰⁾。

兵庫連盟が発行した報告書では、震災後の活動期間を3つの期間に分けている¹¹⁾。第1期は1月18日から2月上旬で、「救援活動を中心に対応した」といい、具体的には「物資の仕分け、搬入及び分配。テント設営、野外活動のアドバイス等」を行った。続く第2期は2月中旬から3月末であり、「避難所における生活の援助奉仕活動」をしたという。具体的には、「避難所での炊き出し、炊き出し物資の調達、薪作り、清掃奉仕等」を行った。そして第3期は4月上旬以降で、「避難所生活者の自立への指導活動、子供たちの心のケアの活動」をしたという。具体的には「ゲーム・ソング・クラフト・スポーツ等のプログラム提供と指導」を行った¹²⁾。

ただ、これらの活動期に関する認識は、活動したボーイスカウト関係者や、活動した地域によって、多少異なっていることもある。そこで、以下では上記の活動内容に即して、それぞれの期間の具体的な動きを見ることにしたい。

(1) 第1期

1月中に、兵庫連盟による阪神・淡路大震災への「本格的な対応がスタート」した。それは、「1. 兵庫県現地対策本部との業務調整の徹底」、「2. 奉仕対象避難所の状況掌握と奉仕業務の計画の具体化」、「3. 全国奉仕スカウト、指導者の現地受け入れの実務」であった¹³⁾。

1月25日付の兵庫連盟による「関係各位様」宛文書によると、兵庫連盟の「地震対策本部」は、兵庫連盟の副連盟長や理事長が「総括」となり、日本連盟の支援を受けながら、各現地本部との折衝に当たる「救援本部」、兵庫県やボーイスカウト日本連盟（以下、「日本連盟」）などボーイスカウト関係との連絡調整を行う「渉外本部」、「西宮救援本部」、「事務局」という部門が設置された¹⁴⁾。これにより、兵庫連盟としての震災復興のための組織が成り立つことになったようである。

2月3日付の兵庫連盟から日本連盟への報告によると、ボーイスカウトのボランティア派遣と受け入れについては、各都道府県連盟が加盟員のボランティア希望を集約して日本連盟に伝え、日本連盟がまとめて兵庫県連盟と調整することとなった。兵庫県連盟は、学校や公園など震災直後の避難先の状況を集約した兵庫県庁のボランティア推進班と連絡を取り、ボランティアの派遣先を検討した¹⁵⁾。なお、西宮市にはボーイスカウト大阪連盟（以下、「大阪連盟」）が震災直後から支援を行っていたので、兵庫連盟から西宮市へのボランティア紹介はしていなかった¹⁶⁾。

(2) 第2期

2月21日付「教育復興促進ボランティア活動報告 神戸市中央区湊川多聞小学校 No.3 95.2.21」によると、ボーイスカウトのボランティア活動について、「仕事内容細部確認と方向付け（引き継ぎ用）」として、「夜の宿直業務」、「窓口業務（来校者の対応・取り次ぎ）」、「横の連携を密に（学校、避難所（責任者：市中さん）、ボーイスカウト、神奈川）」、「配給の手伝い」、「避難者の心身のケアにあたること」、「気がついた活動を行う」を挙げている¹⁷⁾。

宿直業務では、24時間体制を基本に、「治安の維持に努める」とし、「被災者の相談、夜間パトロール、先生方及び被災者との交流を深める。また午前3時に朝食の受取を行う。（日曜日は遅いときあり）」と記されていた。また、窓口業務では「神港病院」、「婦警」、「ボランティア依頼」、「物資（社会福祉センター）」などの対応や、校長や教頭への取り次ぎを想定していた。

さらに、日付当日の活動として、「ごみ収集場所の活動、たきだし名簿の確認・作成、さまざまな外部の人への対応、ボーイスカウトとの打ち合わせ、夜警及び宿直（一人は起きている）、食事の準備、配給（内、外部）、出戻りの人への対応等。」（いずれも原文ママ）と記されていた。

ここには、「今後の課題」も記されており、「食事（外部）の対応」として、「今後減らす方向なので（自活自立できる方向で）少なくする。」とあった。震災後1ヶ

月の時点で、避難所における食事の自活を考えていたことがわかる。

なお、震災発生から1ヶ月半が経過した2月末までに、延べ20,000名余りの「スカウト関係者」が活動した¹⁸⁾。さらに5月18日の報告によると、この時点までに兵庫県内のスカウトと指導者延べ19,164名のほか、国内各地からスカウトと指導者が述べ14,746名が、「奉仕活動」に参加した¹⁹⁾。なお、高校生年代の「シニアスカウト」は、「必ず指導者が責任をもって引率する」こととなっていた²⁰⁾。

3月2日付の兵庫県連盟「阪神地震対策本部」から「ボーイスカウト都道府県連盟理事長」宛の文書によると²¹⁾、「震災後、1か月余が経過し、各避難所も徐々に被災者の人数が減り、奉仕活動の内容も変化し、奉仕分野も限られており、ボーイスカウトの奉仕も質の変化が求められております」として、「ボランティアの人員が過剰」になっていること、「新規ボランティアの支援を必要としない避難所が多くなっている」ことを指摘している。さらに、「長い避難生活によるストレスから、避難所内でトラブルも発生し、その余波を被る事態も現実に発生しており、一部にはボーイスカウト関係者を派遣できない避難所もあること」、「行政等の充実により、ボランティアの撤退を求められている場所もあること、そして「各避難所、或いは市・町のボランティア対策本部も順次避難者の自治運営に移行しつつある」ことを指摘している。震災発生直後とは状況が変わり、ボランティアが過剰になったり、住民の自治への移行が進んだりしていること、また、避難所内のトラブルが原因でボランティア活動が展開できない事例があることを指摘している。

(3) 第3期

上記のことを受けて、3月中のボーイスカウトによる活動は、以下の2点に絞ることになった。第1に、「被災者の野外生活（テント）について助言等を行う」ことであり、ここでは「快適性、衛生面、安全面のアドバイス」を想定していた。第2に、「避難先の子供たちの精神的な安定向上を目指して、学校、公園等で避難生活をしている子供たちにゲーム、ソング、ハンドクラフト、スポーツ等のプログラム提供を行う」ことであった²²⁾。これらのことを前提として、兵庫連盟は以下のような「お願い」の文章を各都道府県連盟に示した²³⁾。

今後の活動は、他の人による与えられた奉仕だけでなく、自らの自発心に基づく奉仕活動が必要であります。これは我々が目指しているスカウティングであり、スカウト一人一人の力が発揮される時でありま

す。今までの報道による情報は過去のものとして考えていただき、自分自身の目と身体で観察し、それぞれの状況において、推理と推察をしながらスカウティングの基本に基づいた実施展開をしてくださるようご理解をお願いいたします。

その方法としては、野外生活の助言、又少年・児童たちにプログラムを提供等多々種々であると考えています。また、多人数による奉仕などでは、例えば、「カントリー大作戦」のような自主的プログラムをご出発前に予め設定されてから、奉仕活動に参加されることも望まれます。

(以下、略)

誰かに何かを指示されて動くボランティアではなく、ボーイスカウト自らが被災地を見て考え、求められる支援を展開して欲しいとのメッセージである。その日の生活に必要な支援を行うことから、「少年・児童たちにプログラムを提供」など、プラスアルファの余暇にも対応できることがあると示唆している。

このことは、ボーイスカウトにできる被災者に対する「心のケア」にもつながる。この点について、以下のような文章もあった(兵庫連盟理事・事務局長小倉侃による)²⁴⁾。

ボーイスカウトでは、被災した地域の幼児から中学生、高校生にいたるまで野外の活動、スポーツ、ハイキング、ゲーム、ソングやクラフトづくりを通して「心のケア」を少しでも図ることのできるよう、各地区、団の社会奉仕活動として長期にわたって活動を続けていきます。

これが、まさに第3期におけるボーイスカウトによる被災者支援である。さらに3月17日、当時の兵庫県知事(兵庫連盟連盟長)が記者会見で「被災者への救援活動は今後は地元県民が中心となって実施していく」との方針を表明したことを受け、兵庫連盟は「長期に互って行う救援活動をすすめるにあたりまして、被災地の状況に則した支援活動の内容」に取り組むことにした。それは「スカウティングが発揮される活動と各種プログラムの提供」であった²⁵⁾。

4. 日本連盟の対応

震災発生後、日本連盟の対応は、次の通りだった²⁶⁾。「1. 被害状況の把握」、「2. 加盟員の安否のチェック」、「3. 全国都道府県連盟への情報提供」、「4. 指導者、スカウトの派遣要請」、「5. 救援物資の提供の依

頼」、「6. 見舞金、義援金の拠出の呼びかけ」、「7. 自治体への救援機材の提供」、「8. ボーイスカウト兵庫連盟に救援機材(テント)の貸与」、「9. 日本連盟事務局職員の派遣」。ここで、人的な支援は4と9で、物的金銭的な支援は5~8で確認できる。このうち、4については「全国都道府県連盟にたいして、被災地への救援活動のための指導者とスカウト(ローバースカウト、シニアスカウト)の派遣の呼びかけ。」とあった。また、5については「救援物資、生活用品、食料品」などの提供を全国都道府県連盟に依頼し、7と8については主にテントの提供をしたという。

5. ボーイスカウトとボランティア

ボーイスカウトの各都道府県連盟には、「県連盟における本運動(ボーイスカウト運動のこと—引用者)が本連盟(日本連盟のこと—引用者)と県連盟の規定に従い展開するよう努めるとともに、県連盟内の指導者に対して助言及び指導を行う」ことや「県連盟理事会の下で、スカウト教育について純正な推進を図り、県連盟理事会に対して責任を負うとともに、教育面及び指導面で県連盟を代表する」などの役割を担う、「県連盟コミッショナー」いる²⁷⁾。兵庫連盟のコミッショナーは、阪神・淡路大震災発生後の3月10日、以下のような「方針」を出した²⁸⁾。

1. ボーイスカウトは、ボランティアができる人を育てるところであり、ボランティア団体ではない。
2. ボランティアは、個人の自由意志であるものであってプログラムではない。
3. 多人数が必要となった場合には、当然仲間に呼びかけることになる。この場合、ボーイスカウトの組織は便利だけれど地域に呼びかけることも大切である。
4. ボランティアをしているのではなく、まさしくスカウティングそのものである。
5. 大人のボランティアが忙しくて、スカウトを犠牲にしているのではないか。団運営者、指導者、ローバー、シニア、ボーイ、カブ、ビーバーそれぞれの立場のスカウティングがある。(引用者注—「ローバー」から「ビーバー」は、大学生から小学生までの学校種学年毎の部門の名称であり、小学生には「カブ」と「ビーバー」がある。)
6. スカウティングであるならば、意思決定機関がはっきりしているので(隊会議、班長会議等)指示、命令機関はない。
7. 被災地とそうでないところ、同じ地域でも被災し

た程度の差、日常の地域との密着度等々方法が全く違う。

これらの引用に続いて、ボーイスカウトとボランティアの関係を「方針」として打ち出したのは、ボーイスカウトの内外から、震災後の活動について様々な意見が出ていたことが理由であると述べていた。それは例えば、「県連の震災対策の基本方針は」、「県の指示は」、「ボランティアにボーイスカウトの活動が取り上げられていないのはどういうことか」などの疑問であった。ボーイスカウト兵庫連盟としての震災復興支援に対する考え、あるいは兵庫県からボーイスカウトに対する指示というものが、それを前提として動きたいという意見や、メディアなどで様々なボランティア活動が取り上げられる中、ボーイスカウトが登場しないことに対する疑問が出てきていたのであろう。

特に、冒頭の1は、世間一般のボーイスカウトに対する見方とは異なるかもしれない。また、2や4の、ボランティアは個人の自由意志であること、ボーイスカウトは被災地においてボランティアをしているのではなく、スカウティング（スカウト活動）を展開しているという主張は、注目に値しよう。自らボーイスカウト活動を通して獲得した知識や技術を、震災復興支援という非日常において発揮しているに過ぎないのである。

本稿で度々引用している、阪神・淡路大震災後の復興支援の報告書には、「ボーイスカウトの理念と運動の本質を考えれば考えるほど、『ボーイスカウト兵庫連盟は組織でもって…』とか、『神戸〇〇地区は全国が結集して…』ということによって救援活動、奉仕活動への号令をかけることができるだろうか…。(中略)しかし、地震対策本部員も本部員も組織としての号令、命令をかけるわけにはいかないのです。」という表現があった²⁹⁾。あるいは、「誰に指示されるのでもなく命令されたのでもなく、組織が組織に所属する人々が、そして個人が自発的に『兵庫に向かおう…』、『神戸を救え…』の考えからボランティアとして行動を起こしたのです。／(中略)／全国のボーイスカウトによる救援活動や奉仕活動はボランティア活動そのものといえます。兵庫連盟を含む全国5万人を上回るスカウトの活動は決して指示されたものではありませんでした。」(「／」は、原文では改行していることを示す。以下、同じ)という表現もあった³⁰⁾。ボーイスカウトによる復興支援活動は、ボーイスカウト関係者が、「個人として兵庫に赴き、救援活動をしなければ、奉仕活動をしなければとの自主性、自発性を発露した実践行動そのもの」なのである³¹⁾。

また、6の「意思決定機関」の明確さと「指示、命令機関」の不在という点については、西宮市内における

ボーイスカウト大阪連盟の活動に関する描写が参考になる³²⁾。

(西宮市において一引用者)早くから市役所の地下1階で避難所への食料供給業務に当たっていたボーイスカウト達は、職員顔負けの活躍を続けており、彼らなくしては避難所への食糧供給はできない状況であった。

「職員顔負けの活躍」とは何であろうか。当初、西宮市役所の地下駐車場では、ボーイスカウトなど何百名ものボランティアが集まり、指示系統のない作業により混乱を来していた。そこで、1月23日の夜にボランティアが集まって、組織作りに関する話し合いをした。ここでの結論が、「ボランティア全員の有機的、効果的な活動を重要点とするためにボーイスカウトの班制度を応用する」というものであった³³⁾。

つまり上級班長のもとに食料の種類ごとに班を編制して班長を置く。一切の班の作業は班会での話し合いと班長の裁量に任せて、他の班の者は口を出さない。全体のシステムや各班の連携の作業は班長同士が話し合い、また市役所に対する依頼事項や市役所からの指示は上級班長を通す。毎夜、班長会議を開いて1日の評価、反省、今後の作業プランについて話し合う。／上級班長や班長は長期滞在者がつとめ、自分が帰宅するまでに次の候補者に仕事を引き継ぐ。みんなで知恵を寄せ合って、効率よくかつ正確に食糧を供給するためのシステムを徐々にではあるが確立していった。

ここには、西宮市役所「生活経済局経済部商工課の卸売市場担当職員」の尽力があったという。この職員自身も、ボーイスカウトの指導者の経験があり、ボーイスカウトの活動に「常に協力的」だったという。「彼を市役所側の窓口としてこの組織が成立した」ということは、幸運なことだったのかもしれない。

ボーイスカウトによる復興支援活動においては、「全ての個人の自主活動が、今回の復旧活動を支えた」のであり³³⁾、「ボーイスカウトは本来こうした不測の事態においても人の役に立てるような個人を育成するわけですが、今回の救援活動では本当に誰が命令したわけでもなく、ボーイスカウト関係者個人個人がそれぞれに自発活動を展開して下さった。連盟組織はその調整などのお手伝いをしてだけです。」ということである³⁵⁾。

6. ボランティアの「調整役」

全国からボーイスカウトがボランティアとして集まりだしたとき、問題となったのが、これらボランティアの手配、調整であった。このことについて、兵庫県連盟の副理事長、長谷川誠資は次のように述べている³⁶⁾。

全国から集まるスカウトに、どこへ何人行ってもらいか、その調整役がいる。全国からのスカウトは、5日とか一週間で帰ってしまう。でも、避難所ではボランティアの継続的な支援が必要だ。だから、この手配師は継続しないと勤まらない。ボーイは皆がボランティアだから、特定の人に長期の継続的活動をお願いすることは、とても心苦しい。／（中略）他のボランティアグループでは、こんな役割の人は何らかの形で有給だったようだ。／（中略）ボーイスカウトでは、自分の仕事を犠牲にして、奉仕してくださった。これは、スカウト活動の素晴らしさではあるが、特定の人にここまでお願いするしかなかったのは、組織の弱さかもしれない。こんな時、有給の手配師を置く手だてはないものだろうか。

この引用文にも、復興支援のような長期的なボランティア活動を想定していない、ボーイスカウトの特徴が見取れる。「有給」の「調整役」が存在するボランティアについては、例えばYMCAがある。ボーイスカウト兵庫県連盟事務局長で、震災後の兵庫県連盟地震対策本部救援本部において「渉外本部・事務局」の役割を担った小倉侃は、後にボーイスカウトとYMCAを比較して、以下のように述べている³⁷⁾。

YMCAさんには兵庫だけで一〇〇名を超える有給職員がいらっしゃるということで組織の立ち上がりが早く、総合的な力を発揮されました。我々はともかく個人個人の自発活動に頼りながら、早退として大きな評価をいただきました。連盟の組織の力ではなく、本当に皆さん一人ひとりのお力です。

小倉は「行政からも、県内二六のボランティア団体中特にボーイスカウトとYMCAの活躍は顕著と評価をいただいています。」と述べた後で、上記の発言をしている。ボーイスカウトとYMCAは有給職員の存在に関して異なっているが、行政からは同等に評価してもらったという文脈であった。

7. ボランティア活動における「責任者」

震災復興における組織的な対応については、兵庫連盟で地震対策本部救護本部長を務めた武内大典が、「権限の問題・責任の問題」に苦勞したと述懐している³⁸⁾。彼は続けて、「我々は組織で活動することを目指してはいませんでした。／ご存知のように私たちの運動の目的は社会に役立つ青少年を育成することです。／しかし、組織で活動できたことは一人一人の自発活動が基盤であったことが、特筆すべき重要な点であると思っています。／それは県内、他県連のスカウトならびにスカウトの方々が、自ら『俺が行く』、『人がいるのですか』、『物資がいるのですか』、『資金がいるのですか』と自発的に動いてくれました。／そして、その人たちに我々は何をしなければいけないのか？その人たちに組織的に、より効果的に、より効果的にとボーイスカウト組織が、その人達一人一人にお手伝いしたということなのです。」と述べている。スカウトたちが自発的に動き始め、それを統轄する組織が必要となったのである。

武内は、阪神・淡路大震災の発生から1年が経った頃、ボーイスカウト日本連盟の機関誌が企画した座談会においても、「判断」と「権限」についての苦悩を述べている³⁹⁾。その苦悩とは具体的には、「××地区に食料が必要だが、購入していいか」という質問や、自治体からの「明日作業で五〇人くらい集まれるか」という問い合わせに対し、即座に判断して回答する必要がある時の「答え」であり、「しかも出した答えの責任は自分にかかってきます。連盟から支出を認めてもらえる保証はないし、五〇人派遣にOKを出したら方々に頭を下げてなんとか集まってもらわなければなりません。」ということである。そのため、普段から「連盟の責任者」という肩書きを誰が持つのか、権限の委譲、判断の方針などを、決めておく必要があると主張している。「ボランティアの一人という立場と、連盟の責任者という立場ではやはり信用が違う。」というが、全体的を射たことである。

8. ボランティア過剰とボーイスカウトの目的

武内はボランティアの過剰な対応について、以下のようにも述べている⁴⁰⁾。

被災者の自立を高め、彼らがこの災害を克服するために復興に向かって何をしていくかということ、最初からしていかないといけない点が大事です。／ある部分のボランティア間では、過保護的、失礼だが上げ膳据え膳という部分があり、一週間立つと『ビールを持っ

て来い』とか言う被災者の方もいて、その場で我々は人間として基本的な活動を行っているのだと説明もし、主張もし、理解していただくように努めました。／そうしたことから、一番考えねばならないことは、ボランティアの振りをしたらダメです。過保護的になるという部分に関連するのですが、例えば、おばあさんに上げ膳据え膳でトイレに手をつないで行ってあげたり、水を汲んであげたりしましたが、『いらんことはしないで』というトラブルもありました。／トラブルの一つには、掃除などはボランティアが最初はしていたが、被災者が自らできる範囲とボランティアがする事の見極めをしていかなければならないということです。

ボランティアが被災者の生活を支援することが、「当然」になってしまうと、かえって被災者の自主的自発的な動きを阻害することになってしまう。あくまで、スカウト活動の範囲において、被災者の生活の支援をすることが求められているのであり、被災者に対して、「ボランティアの振りをしたらダメ」なのである。

だからこそ武内は、「我々の目的は、地震、災害に対してではないのです。／青少年を育てるという見極めをしていかないと、非常に誤った動きになってしまいます。同情心、人情心に入ってしまうがちになる事から、この点では、はっきりとした態度で対応していかないと問題になってくるのではないかと思います。」と述べている⁴¹⁾。ボーイスカウトの活動は、それが震災復興支援であったとしても、全て「青少年を育てる」という本来の目的に向かっているのであるという。そのことを忘れた復興支援は、ボーイスカウトの活動ではないと主張する。そのことは、次の文章にも見られる⁴²⁾。

スカウト仲間に対する援助は当然なことであり、組織として対応できる範囲ではありますが、不特定多数の少年たち、あえていうならば、被災地域の人々をすべて対象として震災が終わったあと、精神的な意味ではその大人に対する部分は、我々援助するべきではなく、他の団体に任せるべきとおもっています。／(中略)／我々のやらなければならないことは、非加盟員と加盟員の少年たちに組織としては、区別なくプログラムを提供する事が、この運動の趣旨が正しく認識され、伝わると考えています。そういったプログラムも必要であれば、とり入れていくのが良いと考えます。

ボーイスカウトの加盟員である青少年を育てること、その一環として、「不特定多数の少年たち」を援助すること、非加盟員と加盟員の区別なく、少年にプログラムを

提供することこそが、武内の考えるボーイスカウトの活動目的なのである。

9. これからの被災地における復興支援活動(ボランティア)

以上、検討してきた阪神・淡路大震災後のボーイスカウトによる復興支援活動において、「自主性と自発をベースにすることから、ボランティアは個人の責任において取り組むべきだ」という議論があることを述べた上で、「ボランティアを個人の意思と責任のみに委ねてよいのか。」と問題提起があった⁴³⁾。それは、ボーイスカウトという青少年を対象とする社会教育活動における、「劣悪な状況下で活動」、「経済的負担」、「奉仕期間と日程の調整のむづかしさ」の3点である。

1点目は、「寝る場所も無ければ食事も不足となり、長時間にわたって不安定な生活を無理じいすること」であり、「健康と安全の維持」について受け入れ側で「責任ある対応をしなければならない」としている。2点目は、「全国から来県したスカウト関係者はすべて自費、手弁当である」ことであり、「最小限のご負担はご好意としてお受けしたが、長期にわたる奉仕活動費と関係経費は受け入れ側が負担しなければならないだろう」とする。阪神・淡路大震災では、国内外からの見舞金や義援金などでまかなったという。そして3点目は、「全国のスカウトから申し入れを受けた奉仕期間と日程は、それぞれの学業と仕事の関係から一律に設定することはできないのが実状である。／スカウトは春休みを除いては学業の合間の土、日に集中することになり、リーダーについてもなかなか年休もとれず、いきおい土、日の日程となることはやむをえないことである。」ということである。「ボーイスカウト関係者の奉仕期間は、概ね平均3日間」であり、被災者の要請と、ボーイスカウトが提供する「奉仕活動の量と質」にはギャップがあったという。

以上の解決方法として、ボーイスカウトでは、都道府県や、それらをさらに区分した「地区」などにおいてキャンプ場を整備していることが多く、それらにおける機材や食料を含めた即応体制を整備しておくこと、日頃から災害に対する経費引き当てを行うこと、1週間から10日間の継続的なボランティア活動に参加できる「教育界」や「産業分野」における「ボランティア活動にたいする理念と制度、運用のあり方」への「一考を求めたい」としている。

10. 本研究のまとめ

以上、阪神・淡路大震災後の復興支援活動においてボーイスカウトによる組織的な活動の実態を概観した上で、ボーイスカウトにおけるボランティアの捉え方について検討した。

1995年1月17日の早朝に発生した阪神・淡路大震災の直後から、ボーイスカウト兵庫連盟はボーイスカウトとしての復興支援活動を展開するため、兵庫県と協力しながら組織的に対応してきた。その様子は、YMCAや社会福祉協議会など各種ボランティア団体と並んで評価され、ボランティアネットワークの一翼を担ってきた。

兵庫連盟は復興支援活動を振り返るにあたって、3つの期間に分けている。すなわち、被災直後の救援活動を行った時期、避難所における援助に取り組んだ時期、そして、避難所生活者への自立指導や子どもへのケアを行った時期である。それぞれにおいて、各地から集まったボーイスカウトのボランティア派遣の人数調整や、時期相応の具体的な支援活動に取り組んだ。

復興支援活動にボランティアとしてボーイスカウトが参加することについて、兵庫連盟の指導者から、ボーイスカウトはボランティア団体ではないこと、ボランティアは個人の自由意志でありボーイスカウトのプログラムではないこと、組織としてのボーイスカウトは指示や命令をする機関ではないことなどの基本的な考え方が打ち出された。これらのことは、ボーイスカウトをボランティア団体と評価する世間一般の考えとは、一線を画すものである。

このようにボーイスカウトとしてボランティア活動に対する考えを示したものの、実際には、兵庫連盟においてボーイスカウトによるボランティアの手配や調整に関する、責任者不在の問題が生じていた。そもそも、ボーイスカウトの目的は何なのであろうか。このような災害の復興支援活動という場であったとしても、その目的は「青少年を育てる」ことにある。ボーイスカウトは普段から、自然災害に対応する知識や技能を養っている⁴⁴⁾。

ボーイスカウトの野外活動や訓練プログラムにおいては危険を回避し、安全を維持するための注意と対応をスカウトに理解させ、実践させることもできますし、万が一の事故にたいしても予め必要とする手だてを検討したり、講じておくこともできます。

もちろん、危険回避や安全維持、事故対応に関する子どもたちへの指導も、本来的には、「青少年を育てる」ことが目的である。このことを前提として、これらの知識や技術を身につけたボーイスカウトが、阪神・淡路大震

災のような自然災害発生後に、ボランティアなどとして活躍することが期待されるのである。

「青少年を育てる」ことを目的とするボーイスカウトが、震災発生後の復興支援活動に取り組むならば、例えばそれが自発性、無償性、公益性に基づくものであったとしても、健康と安全の維持、経済的な支援、そしてボランティアの量と質の調整という課題は今後、何らかの形で解決する必要があるだろう。このように考えるならば、ボーイスカウトという「青少年を育てる」ことを主眼とする組織や活動が、何らかの自然災害が発生した地域においてボランティアに取り組むためには、従来の大人がボランティアをすることを前提として議論とは異なる、新たな論理が必要となる。それを考える手がかりを、以上の通り、示すことができたと考えている。

本研究は、JSPS 科研費15H01985の助成を受けたものである。

注

- 1) それゆえ、1995年を「ボランティア元年」と表現することもある。
- 2) その一例として、ボーイスカウト日本連盟による「平成23年度東日本大震災支援活動報告書」(www.scout.or.jp/_userdata/tomonisusumou/h23_report.pdf、2018年11月17日アクセス)がある。これは震災後の「災害現地ボランティア」、「義援金募金」、「被災地の衛生環境の改善支援」、「海外からのミネラルウォーター10万本の国内輸送と配布先調整」の他に、「被災した子どもに対する支援活動」として「『子ども遊び場』支援プロジェクト」、「岩手しぜんとあそぼうキャンプ in テンパーク」、「ニコニコキャンプ」、「森永製菓との連携でフェンシング太田雄貴選手との工場見学を引率」、「書学生向け文房具セット(友だちバック)の受付と種分け、配付」、「INDY® JAPAN THE FINAL への招待」といった取り組みについての、簡単な報告書である。「災害現地ボランティア」には、延べ1600人が参加し、「義援金募金」では111,277,255円が集まったという。
- 3) 歴史を遡れば、関東大震災の後にも少年団(当時のボーイスカウト)と文部省が、被災した子どもたちを対象とする「野外少国民学校」を開設し、子どもの居場所を提供していた(圓入智仁「少年団による関東大震災後の活動 —『野外少国民学校』の取り組み—」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第49号、2017年、111-116頁)。
- 4) 金谷信子「3章 イニシアティブはボランティアの手に被災地のボランティア」本間正明・出口正之編『ボランティア革命』1996年、19-42頁。
- 4) 同上、39頁。

- 5) 「4. NVN 参加団体」西宮ボランティアネットワーク (NVN)『ボランティアはいかに活動したか 震災60日もうひとつの阪神大震災記録』、1995年、199頁。
- 6) ボーイスカウト大阪連盟は、西宮市にある阪神甲子園球場で開催される春の選抜高等学校野球大会の開会式や閉会式で、国旗や大会旗などを持つ役割を担っていた。このような背景があったためか、ボーイスカウト大阪連盟は西宮に集中的に関わり、「機能的に」動いたようである(「武内大典『震災発生直後、対策本部の動き』ボーイスカウト日本連盟『SCOUTING』No.503、1995年4月、5頁。)
- 7) 入江幸男「1 ボランティアの思想 —市民的公共性の担い手としてのボランティア—」内海成治・入江幸男・水野義之編『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社、1999年、4-21頁。
- 8) 文部省生涯学習局長通知「生涯学習審議会『今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について(答申)』の送付について」、文生第176号、平成4(1992)年8月3日。
- 9) 日本ボーイスカウト兵庫連盟理事長富永和男 災害対策本部長武内大典「知事(日本ボーイスカウト兵庫連盟長)への報告書」日本ボーイスカウト兵庫連盟『1995年1月17日: ボーイスカウトの阪神、淡路大震災』1996年、13頁。「阪神・淡路大震災の日から ◆◆◆15日◆◆◆」(同上)、28頁。
- 10) 「兵庫県救護対策現地本部設置場所 94/01/27」(同上)、75頁。
- 11) 日本ボーイスカウト兵庫連盟理事長富永和男 災害対策本部長武内大典「知事(日本ボーイスカウト兵庫連盟長)への報告書」(同上)、13-14頁。
- 12) 「クラフト」とは、小枝やどんぐり、石、紐などを使って工作をすることである。
- 13) 「阪神・淡路大震災の日から ◆◆◆15日◆◆◆」(前出)、30頁。
- 14) 「日本ボーイスカウト兵庫連盟関係各位宛文書」(同上)、59頁。
- 15) (財)ボーイスカウト日本連盟(兵庫連盟へ出向)金井「奉仕局の派遣先について」(同上)、44頁。
- 16) 財団法人ボーイスカウト日本連盟事務局長荒尾雅也「兵庫県南部地震について(連絡 No.3)地元救援活動への奉仕について」(同上)、48頁。
ボーイスカウト大阪連盟の加盟員で、「西宮市は高校3年間の思い出の地」であるという伊永勉は、震災発生当日にボーイスカウトとして「何かしなければいけないと気づき」、翌日に西宮市役所に到着して、ボーイスカウト大阪連盟と西宮市役所とのパイプ役を担い始めた(伊永勉「本部長日誌」西宮ボランティアネットワーク(前出)、16頁。)
- 17) 「教育復興促進ボランティア活動報告 神戸市中央区湊川多聞小学校 No.3 95.2.21」ボーイスカウト兵庫連盟(前出)、87-88頁。なお、「避難所(責任者:市中さん)」や「神奈川」の詳細は不明である。
- 18) 財団法人ボーイスカウト日本連盟事務局長荒尾雅也「阪神大震災地元救援活動への奉仕について(No.5)」(同上)、52頁。
- 19) 日本ボーイスカウト兵庫連盟理事長富永和男 災害対策本部長武内大典「知事(日本ボーイスカウト兵庫連盟長)への報告書」(同上)、14頁。
- 20) 財団法人ボーイスカウト日本連盟事務局長荒尾雅也「兵庫県南部地震について連絡(No.4) —兵庫県下での活動にあたって—」(同上)、51頁。
- 21) ボーイスカウト都道府県連盟理事長宛、日本ボーイスカウト兵庫連盟阪神地震対策本部「阪神大震災地元救援活動の実態とお願い」(同上)、69-70頁。
- 22) 同上、71頁。
- 23) 同上、73頁。なお、文中の「カントリー大作戦」とは、ボーイスカウトの活動として、放置されている空き缶などのゴミを拾うといった、清掃活動を指す。
- 24) 小倉侃「PTSD(心的外傷後ストレス障害)」ボーイスカウト兵庫連盟(前出)、89頁。
- 25) 財団法人ボーイスカウト日本連盟事務局長荒尾雅也「阪神大震災地元救援活動への奉仕について(No.6)」(同上)、54-55頁。
- 26) 石川嘉唯「スカウト活動のカーそれは奉仕」(同上)、98-99頁。
- 27) ボーイスカウト日本連盟教育規定(平成28年版)第4章第19条より。
- 28) 日本ボーイスカウト兵庫連盟県コミッショナー山田明良「コミッショナー通信 平成7年3月10日」(同上)、78頁。
- 29) 執筆者不明「1. 組織と個人」(同上)、134頁。
- 30) 執筆者不明「3. ボランティア活動を考察すると…」(同上)、137頁。
- 31) 執筆者不明「1. 組織と個人」(同上)、134頁。
- 32) 松永博「ボランティアと行政の連帯」西宮ボランティアネットワーク(前出)、76頁。
- 33) 中西史彰「救援物資日記」西宮ボランティアネットワーク(前出)、93-94頁。
- 34) 「阪神・淡路大震災から1年 ~ボランティアのあり方を探る~」(ボーイスカウト日本連盟『SCOUTING』No.511、1995年12月、5頁)における武内大典の発言。
- 35) 同上(7-8頁)における武内大典の発言。
- 36) 長谷川誠資「ボランティアの心で結ばれたスカウト活動」ボーイスカウト兵庫連盟(前出)、108頁。
- 37) 「阪神・淡路大震災から1年 ~ボランティアのあり方を探る~」(前出、6頁)における小倉侃の発言。
- 38) 武内大典「阪神・淡路大震災の救援活動を顧みて」(前

- 出)、117頁。
- 39) 「阪神・淡路大震災から1年 ～ボランティアのあり方を
探る～」(前出、5頁)における武内大典の発言。
- 40) 武内大典「阪神・淡路大震災の救援活動を顧みて」(前
出)、116頁。
- 41) 同上、116頁。
- 42) 同上、118頁。
- 43) 執筆者不明「3. ボランティア活動を考察すると…」(前
出)、137頁。
- 44) 執筆者不明「2. 読める危機管理を越えた大災害」(同
上)、135頁。